

電子複写不可

野戦重砲兵才一聯隊関係史料

①

台
沖 繩
320

防衛研究所戦史部



野戦砲兵第一聯隊 (通称号球四四。一部隊)

○沖繩県糸満市摩文仁原野の連隊指揮班

(山根忠連隊長以下戦闘指揮班と通信班第一、第二中間点要員、眞壁本部から六月十九日早朝井潤満大尉と来た教官の兵隊連と糸満市眞壁の連隊本部(経理部、兵器班、自動車班、観測班)と通信班、無線班の一部兵隊達を含む)病院壕の最後の状況

野重一連隊二大隊本部恩田上少尉摩文仁原野から

山根連隊長の最後の命令を軍司令部へ届けける

恩田上少尉 三重県出身生存者(昭和五十二年に沖繩戦跡訪問) 現住所 7630 奈良県西記寺本町 四五丁上 042 (2) コリオ番

○恩田上少尉(通信掛将校)は沖繩戦も終り頃と産岳と八重瀬岳で居り米軍の進撃で摩文仁原野へ後退した。たまに山根連隊長と摩文仁原野で会う場所が指揮班集結地である。昭和二十年六月十九日夜(七時前後)山根連隊長からの命令を恩田上少尉が第三軍司令部へ報告に行った。内容は「野重一連隊長山根忠は摩文仁原野北の方陣地で最後の戦才指揮を執る」というもので軍司令部の副官名前記憶不明に届けられた。

○第五砲兵司令部内では白神盛文高級軍医(昭和十九年七月十二日沖繩上陸後野重一連隊から第五砲兵司令部通称号球九七〇〇へ配属)の顔を見ました。私は当時軍医の転属されたことを知らず野重一の上級者であると思われ、これから壕を出て行くと申し上げるといなすかれて、私は此處からは出ないと云われたのでお別れの挨拶をして壕を出ました。

○井潤大尉は六月十九日早朝眞壁本部より摩文仁原野の集結地へ帰る。恩田上少尉は摩文仁原野で六月十九日午後から夕刻まで井潤大尉と会話時間話し合っている。二人は旧満州神武屯時代から非常に懇話にしていた。恩田上少尉は昭和十九年十月十日から千葉県四街道野戦砲兵学校へ通信掛将校集合教育を受けた。帰途十九年十月十八日か十九日に福岡県の井潤定へ立寄って沖繩の状況を報告している。尚、井潤家は代々紀州徳川家田辺藩家藤家へ仕え代々の墓は現在田辺市にあり井潤大尉は田辺中学出身で同じ県人である事を昭和五十二年四月四日に東京で白神軍医の三子夫人と井潤大尉

の妹貞子さんと三人で会った時、貞子さんの説明で初めて知った。
 井瀨大尉は宇佐岳、摩文仁原野等、山根連隊長と行動を共にし、特に宇佐岳、摩文仁原野、眞壁本部の三角形地帯の連絡に務めた。そして六月二十日部隊の戦闘終了まで任務を果す。
 井瀨満大尉は第四中隊長、野村孝治大尉（奈良県出身六月二十二日眞壁戦死）と士官学校同期生である。
 恩田少尉は終戦後米軍に收容され、其の後米軍兵士と一諸に友軍の突隊達を各地で救出する。そして昭和二十年十月頃米軍当局にお願して米軍兵士と一諸に摩文仁原野で山根連隊長の遺体を確認し、其の時遺品收拾をした。
 昭和二十一年復員後、金沢市の山根夫人宅へ遺品を届けける。
 その後昭和五十三年七月八日高野山本覚院で沖繩戦没者三十三周年追善法要の日、山根夫人と恩田少尉が三十二年振り再会した。そこで摩文仁原野の当時の状況を関係者の席上で再確認した。
 恩田さんから私宛の手紙、昭和五十三年十一月五日付消印（原文のまま）

前略だが、詳細なご連絡を頂き有難く存じております。
 沖繩戦に於ける野重一主として連隊長を中心とした最後の戦斗状況は、ままとめらるるに当り、小生にご照会のあった点につき、気の付いた点には、朱書きいたしました。当時オニ大隊本部の通信掛将校であった小生が、何故部隊が最後の場所となった摩文仁に行つたかにつき、申し述べる要があると思ひますので、その概要を記しました。ご存知の通り、沖繩戦に於ける攻防勝敗は首里の防衛ラインの崩壊により、日本軍の組織的な戦斗は終り以後は、局地戦的な称相に変わりました。小生も開戦当時は西原棚原の才線歩兵の大隊本部近くにあって、米軍の戦車歩兵を眼前にして無線にて砲撃の彈着地等の修正を砲列に連絡、戦局の推移に伴い、小生の任地を移動し、首里地方の前田付近の戦斗に参加して、いた頃が、今からふりかへり考えれば、当時が沖繩戦の頂上にあつたように思ひます。
 私が前田方面に移動する頃には、大隊本部指揮班長の河野中尉が同方面で戦死の報を聞き、たが誤報のようで、河野中尉には不思議な縁とでも云うので、いか終戦後、同類へ何って北上中、の小生とすてに收容所入りをして生存者の放出作業に当つておられた同中尉と山中で出逢

うことになった次才です。頑強な抵抗をつけた防衛陣地も
 じりくとして後退を余議なくされることになりある日聯隊本部
 も首里から後退するのをオニ大隊本部も後を追うことになり
 の生はさらにオニ大隊の最後部を落ちこぼれの矢のないうり
 殿りをつとめることになりました。首里の連隊本部のあった
 ところへ来た時 先行した連隊指揮班長 山本中尉が眼下に見る
 一日橋で戦死をされたとの報を受けました。雨の降る暗い夜で
 した。最後に残った十数名の兵士と一氣に一日橋を駆け抜け
 したが、当時皆疲労の極にあり南風原―東風平と雨の中
 を後退する頃は戦音はおろかもうミニエ置いていくと泥の中
 に立ち入り込んでしまふ兵士もあり彼等をおどかしはせし本隊の
 行く先をさかしながら殿りを務めて後退したときふとその日
 同じように戦いに破れた平塚の落武者のことが脳裏をかすめ
 ました。そのようにして八重瀬、与座へとたどりついた時大隊長
 副官もすでに行方不明とのこと此こでそれまで行を共にした兵
 と別れ連隊本部へ単独行がはじまったのです。何処でどのよう
 にして訪ねていったかはつまり記憶がありませんが後にお聞きした
 連隊長戦死が六月二十日としますと逆算して小生が連隊長を
 探がし当てお逢いしたのは十九日午前中と申します。その日の
 午後井潤中尉と逢い数時間夕方米軍戦車の攻撃を受け
 るまで話し合ったのです。その日の攻撃は日没間近だったので
 間もなく米軍は引揚げ小生は山根隊最後の陣地を報告の
 ため軍司令部の壕に向ったのです。壕内はごった返してあり
 比自一様に最後の時が来たことと昂奮の極にあつたようです。
 小生も誰にどのような報告をしたかも確かな記憶がありません
 何処を伺っても知らぬ顔ばかりです。然しそこで生きて固頭部
 に集結せよと云はれたことは間違ひなく大きな握り飯を皆二個づつ
 もらって壕を出て行きました。その途中中田心もかけお白神軍座
 の顔を見したのです。私は当時軍座の転属されたことを知
 らず野重一の上級者であると思ひこれから壕を出て行くことと申
 し上作るといふ事かされて私は比処からは出ないと云われたので別
 れの挨拶をして壕を出ました。山口上は既に米軍が進出、夜
 でしたか間断なく機銃の猛射を浴びせてくるのでこれでは
 前進は無理と旧心の東南の方へ後退しながら断崖の淵を東方

に伺い相違下つたところ、木の根をつたって海岸に降りました。その頃、夜が明けはじめ、私の北帰行の才一日となったのです。以上お問合せの事柄を中心に、生の行動の概略を記しました。既に以前お話しした事を重複する点があり、訂正と小生の判断を記入下さい。別紙フビにも米書にて訂正と小生の判断を記入致しました。ご参考なれば幸甚です。年末を控え、何かとご多忙のことと存じます。

十二月四日

恩田 上 拜

内 畑 弘 様

昭和二十一年頃、米軍救護収容所で山根連隊長の当番兵、古川勲さん（生存者、私歌山県出身）の依頼で、現地生存者、第四中隊の島や夜盛吉さんと学徒兵本部の新垣良美さんの二人が、摩文原野の山根連隊長戦死の場所へ、木の皮で作った「山根連隊長戦死之地」と書いた塔婆を建立に行く。その塔婆の書は、連隊長本部生存者の福島正幸さん（私歌山県出身）が書いた。この善意な建立については、私が昭和三十五年十一月十七日戦後初めて沖繩を訪問した時に、新垣良美さんからこの話を聞いたのである。この塔婆の建立の依頼主は古川さんと福島さんである。ところが、昭和五十三年二月四日（立春）に三十二年振りに自宅にて古川さんに聞いた。以上の通り、摩文原野で昭和二十年六月十八、十九、二十日の三日間、山根連隊長以下兵隊達の最後の調査も殆んど終り、今後生存者から摩文原野の新しい事実の報告は期待出来ないと思われます。

野重一連隊摩文仁原野の連隊指揮班と

真壁連隊本部の三日間の内容

○六月十八日 午後山根連隊長以下連隊指揮班員と第一二通信班員五十名余(生存者八名を含む) 全員摩文仁原野へ集結の由

○六月十九日 早朝井瀨大尉と連絡員一名(氏名不明) 其の他数名真壁本部より米須経由で道路に添って来たと思ふ摩文仁原野の集結地へ到着其の後全員消憶判明出来ず戦死

・真壁本部から山井幸雄さん伊藤龍三さんが朝出発し山根連隊長に晝頃摩文仁原野の集結地で会う

・内畑さん朝十時頃集結地から摩文仁原野の手前の今もある池へ水を取りに行き、負傷する

・松屋利男さん 網城永太郎さん二人は集結地から坑を少し離れた所に移動する 網城さんは七月十九日に井瀨大尉と

・渡辺康次さんの二人を摩文仁原野で見た印象が強く残っている。特に井瀨大尉が忙がしく動いていたと語る

・恩田さんが集結地から夜軍司令部へ山根連隊長の最後の命令を持って行く

・通信班の第一 第二 中岡兵の状況について 太田未治さんが詳細に報告

・指揮班の摩文仁原野の生存者八名の内 暗号班一名 山口早さんが 摩文仁原野の七月十九日 二十日の最後の状況は詳しい

・横川さんが山根連隊長最後迄行動を共にし 摩文仁原野の松林の岩のある所の状況が詳しい

・(真壁本部) 六月十八日 六月十九日の状況と二十日米軍に収容される時の横林について

○真壁本部の小西輝一 聖理部 准尉(兵庫果出身) から私危の手紙字し 昭和三年八月二十九日付消印

・叔御叔越しの件についてですが 小生は真壁本部の聖理部准尉でした 岩永大尉の指揮下にあったわけですから

・山本良一大尉(五月三十日一日橋戦死) 指揮班長戦死後

・山石永大尉が交代したのが岩永大尉は背負傷(大傷)を受けて真壁本部病院で入院して 実際指揮班長の任務は取り得なかった 六月十八日夕方井瀨大尉及上等兵一名(前死)

連絡あり 岩永大尉に對し尺命令で病院を速やかに閉鎖し 戦斗に参加出来る者は米須(今のひめゆりの塔附近か)に集結せよ だった称に思いますが 其の後 重傷者等の問題もあり 閉鎖には時間を要し 集結に間に合わなかったため 脱出する事に決めた(六月十九日夜)

① 岩永大尉 一門中尉 加藤准尉 小生 細谷曹長 兵 特志看護婦 (防衛隊学徒隊) 約三名 脱出するも 失敗し 又壕に閉じこめられた

② 柳曹長 生存者及その部下の兵若干名 北村主計(嘉二) 軍曹(戦死) 及兵三名 (北村軍曹は 和歌山高岡卒 現在 和歌山大学経済学部) 喜屋武押方面に行くと云って出た まゝ不明(三重県出身 育ち自国古戦死) 以上の如く 眞壁の壕も各自行動を別々にした、ゆゑ不明になった 方々が出ました

眞壁の壕外ですが 壕の近くの個人壕より 六月以降に於て 救出した方に 無線の水野少尉が居られます 小生少々記録 を持っていましたか 其の後 火災のため 一切焼失 残念でなり ません (原文のまニカッ内) 内畑 著

③ 眞壁本部自動車班 生存者 鈴木伴銀さん(神奈川県出身) から 私宛の手紙で 昭和三年九月四日 付 消印 宛に出します と、つきつきの称な思ひで、よく今日まで来たものと思ひ、 眞壁の本部の件に付、てあなたと何回かお会いしたので、 最後の状態について書きます。 日には、はつきりしな、か(六月十九日夜 息う) 六中隊の下士官、兵が三名 程 生存者 岩永茂磨さん(佐賀県出身) 最後の別れ に来て 砲も取られて、これから 切込に行くと云って 出て行きました。 本部解散する 健康な者は、それく、 二三名にて 行動する。 病院の 負傷者も 歩けるものは、 それく、 壕を出て行く。 銀子軍(特志看護婦隊)も、 沖繩の 三千名程の 青年隊(学徒隊) 中、でも、一番 元気の 良かった 佐藤兵長(佐藤正夫 六月二十日 午産戦死) 関川(経理)(関川太京 六月十九日 眞壁戦死) 泉(泉清治郎 六月二十日 小城戦死) 三名は、一番 先に 出て行った 田中中尉(田中 之雄 六月十九日 眞壁戦死)

は負傷して一人で歩けなかつたので、銀子軍(前記)の一人が手を取って行った。姿は今も忘れない。それらの方々の行動が出来る人、岩永さん(生存者)、一内善人さん(六月十九日真壁戦死)、細谷昇さん(生存者故人)、東谷丹音さん(生存者故人)、広瀬義一さん(生存者)、最上末希さん(生存者故人)、も居たと思ふ。伊藤長造さん(生存者)外に三名居たと思ふ。共夜(六月十九日)全員壕を出て、国頭へ行く途中で考えれば、ナシセエの気がした。少し歩いた。照明弾はひっきりなく上り、満月より明く、ピヤノ線に懸ると自動小銃でバリバリ、全然行動出来ない。壕に引返す(十九日夜中か)翌日(六月二十日)馬乗、広瀬義一さんが最初に発見中より見れば銃を肩に掛け、髪もじざな、赤ら顔、生きている気はなかったから、どうも死んでやる筈な中程から奥へ入った。岩永さんの考え、私の推測、米軍と話をして全員降る考え、内中尉に話をさせるつもり、何故かは私か。岩永さんと三日、一諸に隣で寝ている間、生きたい者の考えを話して、三日程前最後だから他人に悪用を付けた。称に本部金庫トランプ、二個拾月紙幣、五ノールを付けた。後より山部隊の兵、三四名来て一諸に居た。馬乗り、二時、三時、四時、過ぎ、黄燐弾数発を打込まれ、尚全員黙って居る。其後、米兵三名がピストル片手に電燈をかざして入った。其の時、岩永さんが一内さんに米兵と話しをして、始めて、それを言った。一内さんは、私はいやだ、奥へ行こう、と、岩永さんが英語で出た。うたな、米兵が早く出ろ、岩永さんが一番先に首んな出ろ、行かれた。其の首、真壁の学校(小学校)を右に見て、水陸両用戦車、一列、百台、有る所の地面(六月二十日夜)で一夜を明す。翌日、上ヶ原で塚山(津嘉山)の長谷所へ夕方着、岩永さんが内所に来ると、無事を喜んでくれた。三日、住居して石川(石川市、嘉怒谷所)へ三ヶ月程で

楚辺(讀谷村楚辺収容所)へ楚辺で横川氏(敬夫)

大田氏(未治)と会う何故か本部の人々と別になつてしまつた理由が解らない

復員後二見(武雄)生存有故人とは時々会う病気が出て早く去る

車谷 左瀬 自宅へ訪内 山口氏は折を見訪ねる

内畑さんにお願 伊勢市出身川端光雄氏(五月千音宮城戦死)

首里城で稲葉(和夫)首里戦死)中尉と戦死優等な方私も山田(伊勢市)には三四回行くが調へないで心にはしてゐるのです(川端光雄さんの遺族判名私から報告)

長瀬の御無音失礼 貴家の祭米御健闘を祈る(原文のまま、(カソ内)内畑書く)

六月十九日夜真壁本部より東風平村小城に向つて米軍の前線突破し小城(米軍上陸(前後)連隊本部駐屯地)と真壁へ下がる近連隊本部として坑を利用する)

(六月二十日戦死暗号班)横山敏男(六月二十日小城戦死)自動車班)志佐清(六月二十日小城戦死)自動車班)生存者一名森川徳雄さん(滋賀県出身)五人が小城の山で米軍との戦を交しえ四者が戦死

其の時の状況について森川さんが非常に詳しい(以上齊文語)

当時小城の仲産明光さんが自分の家の近くの坑であったが山の方面米西軍の激しい銃撃の討合があつたと昭和五年十一月

訪内の時に私に語る其の時仲産さんの案内で近くに自産壕を利用した納骨所には数拾体の遺骨が祭られつた

又戦争中小城の公民館の前に米軍の大きな大砲の不発弾が落ちてつたのを私知つたのでたづねると戦後無事処理したとの事を知り安んじた

米軍が四月一日沖繩上陸後野重連隊本部の自動車班は六月十五日頃迄真壁本部を最後に輸送した自動車班の運転士と助手の三組について左記の通り

運転士宇津田豊さん(六月二十日摩文仁戦死)

助手志佐清さん(六月二十日小城戦死)

運転士杉山正一さん(六月二十日小城戦死)助手小田務さん(六月二十日真壁戦死)

運転止横山敏男さん(有言音小成戦死)功守福島正幸さん(生存有發真出身)他に数名の自動車班の兵隊達が有り毎日の運行計画は紐谷曹長の指揮下にあった。私も小成本部から伴向首里識者の前線へ行く時宇津田さん杉山さんの自動車によく乗り合わした。五月二十日小成本部から眞壁本部へ下る時二人のどちらかの自動車を利用した。多分杉山さんの自動車と思ふ。自動車班は沖繩戦開始後小成本部に五月末頃迄本拠地として前線へ送る物資の集積地でも有効に活用出来た。小成当銘の残留した民間人の方々も最後迄兵隊達の要望に堪へ協力してくれた。特に前線へ送る食料等の補充物資の提供にこそ部隊の作戦上重要な要素となった。今回の記録文を書くに当たって野重一連隊の兵隊達が戦争中に受けた御好意に対し戦死者遺族に生存者の皆さんに代り厚く感謝の意を表わすと共に沖繩戦で砲火にさらされ多々の肉親を失った方々に對し永く哀悼の意を表し小成と当銘の首領の御健康と御発展を永く御祈り致します。

思ひで多々眞壁本部の自然壕は私が紺碧のかなたに書いた通り昭和二十一年五月二十日(海軍記念日)に成田四郎さん(六月十八日午産戦死)と私と二人で最初に発見した壕でありあります。六月二十日山根連隊長以下連隊指揮班員、オ一オ二中団点の通信班員、井淵大尉と一諸に来た。眞壁の連隊本部員、数名の摩文仁原野の状況について私が昭和二十一年二年沖繩米軍収容所で書いた手帳と復員後記録した資料にもとずいて昭和二十二年九月から生存者遺族関係者から再調査し確認の上昨年かう管村方に御送付した次オです。

尚恩田少尉の項目について昭和二十三年十一月音付消印の手紙で恩田さんに確認する。

昭和二十三年十一月十五日(七五三の日) 紀州にて

内畑弘 記録する

私のしおり 元野戦重砲兵オ一連隊本部自動車班後に観測班
経機関鏡(三看あり) 昭和二十六年十一月三日沖繩紀乃園之塔

昭和十九年八月十日沖繩戦没者高野公供養塔 昭和二十年六月十日沖繩
砲兵山吹之塔の三塔の除幕式に参列
終りに沖繩戦に散った野戦重砲兵才一連隊連隊本部才二大隊本部
才四 五、六中隊の戦没者に対し心から御冥福を御祈り申し上り
ます。昭和二十三年十一月五日付で山根連隊長寿美夫人より最近の心境
を伝える私宛の短歌

ハラ／＼と小川に流る落葉かな 村野里にて

(敬称は略氏名 戦死月日 場所は厚美省の在簿による年月が経過してまますので
夕方の変更があります)

野戦重砲兵才一聯隊編制概要

注ノ本表は沖繩におけるものを示す

昭和十九年六月十日陸軍機密才三三三号により、聯隊段列
大隊段列を天除し、牽引車六〇、自動貨車二〇、その他が
天除され、天除後の人員基準は、聯隊は一三〇名とされた。
本表は帰還者報告資料により記述した。

聯隊長 山根 忠大佐 (28期)

聯隊本部 大隊二かうなる

聯隊本部 人員約一〇〇名(筆者推定)昭和十九年七月十日沖繩島上陸

才一大隊は大隊本部、中隊三かうなる昭和十九年七月七日宮古島上陸

大隊の総員六〇六名、九六式十五糶榴弾砲二門、九〇軽(重)

観測車三(二)八九式六屯牽引車(増処)六(三)

九四式自動貨車七、小銃二七〇を装備

中隊は十五糶榴弾砲四門、大隊は臨時に段列を存して作戦した。

才二大隊は資料明らかなが才一大隊とはほぼ同じと推定される。

(防衛庁防衛研究所戦史室沖繩方面陸軍作戦資料に依る)

昭和十九年六月十日満洲神武屯から沖繩まで(満洲才八六部隊)

昭和十九年六月七日部隊動員下令 旧満洲神武屯

六月二十七日出發 金山六月三日着 金山七月二日出港

下関七月三日入港 下関七月四日出港 鹿見島七月六日入港 鹿見島

七月八日出港 那覇朝倉十月方入港 七月十日朝上陸開始 船団数隻

一通商荷上作業 野重二連隊南風原小学校七月十九日当有(内畑の資料に依る)

